行商にトラブルは要らない！！

ひょっとこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
行商にトラブルは要らない！！

【Ｎコード】
Ｎ３９７９ＢＡ

【作者名】
ひょっとこ

【あらすじ】
フラフラだらだら。
商人の主人公は、原作を知らないから勝手気ままにしてるけど、何故か原作キャラや厄介事に引き寄せられ、巻き込まれてしまう。そんな感じ。

取引１（前書き）

エキュー：１万円

新金貨：１，０００円

スゥ：１００円

ドニエ：１０円

こんな感じで勝手に設定。

取引1

トリステイン王国

謙虚なまでに領土が狭いが、肥沃な大地と背後に望む海が人々に恵みをもたらす。

だが……

西の海の天空には、空島アルビオン大陸。

東と南には、トリステイン王国の何倍も領土が広いガリアとゲルマニアの2大国。

情けないが陸地は完全に包囲されている。

挙げ句の果ては、国の頭から末端まで宗教国家に完全押さえ込まれてる始末だ。

もし何かの拍子に戦争が始まれば…文字通り初っ端から背水の陣を宿命づけられた弱っちい国。

ぶっちゃけ、始まる前から9：1くらいで詰んでる雰囲気が漂ってる国。

この国こそ、オレが再び生まれ、育ったしょうもない国だ。

そして今、色々あって首都トリスタニア……のクソ汚ェ路地裏に店を構えるしみったれた武器屋に居る。

「ハァ～～。
アンタは長年この界隈で武器屋をやってきた人間だ。見る眼も有るだろうな。
その上、試し斬りしたなら、この剣がそんじょそこらじゃお目に掛かれねぇ業物っつうことくらい分かってんだろ？んン？」

「だったら何だよ。この値段！
切れ味が良いとはいえ、ただの剣が５００エキュー！？ぼったくりもいいところだ！
トリスタニアじゃ、逆立ちしても２００で売れるか売れないかだ。」

「いやいや、ぼったくりとは聞き捨てならねえな！
ソイツは唯単に切れ味が良いだけの剣なんかじゃないんだよ！
剛性と軟性を兼ね備えるように、この俺が心血注いで、作り上げた逸品だ！
それをたかが１００エキューなんて端金でギろうなんて、バカか？」

「いんや、バカはお前だ。タコ助野郎。

こんなひょろっひょろの剣なんざ、使いモンにならないんだよ！」

あぁん？何だぁ、この野郎！そいつは聞き捨てならねぇな！

「テメェ…オレの刀をひょろっひょろっのゴミっつったな！」

「何度でも言ってやらぁ！ひょろひょろのひょろっっひょろ！！」

「……その鼻っ柱、ナイフで根元から削ぎ落とすぞクソジジイ！」

「テ、テメェ！若僧の分際で俺に向かってクソジジイだと！？」

事の起こりは簡単だ。

武器屋のジジイに呼びつけられて、ある程度の剣を見繕って行商がてら商談に来たが、いざという所でゴネて来やがった。ちぃっとカチンと来たが、まだ誠実に相手をしたんだぜ？

なにしろ鉄も切り裂く切れ味を持つ刀……大剣だから、値切りたくなる気持ちも分からんでもないしな。

最初のうちは、懇々と刀の利点やら素晴らしさ…果ては、この武器屋の裏に有る空き地で試し斬りまでして貰って、考えを改めてもらおうと思っていた。

そしたら、やれ『若僧が口答えするな』、『若僧だから物の価値が分かって無い。市場じゃ売れない。』だと、高圧的に言われりゃ、プッツンするだろ？

「せっかく贔屓にしてやろうと思ってたが、もう止めだ！今すぐ表ェ出て消え失せやがれ！」

「ハ、年中アル中でマトモに鍛冶場にも立てねえジジイが！
テメェが武器仕入れてえからって呼びつけておいて、表に叩き出すたぁ上等だ！
こんな店と商売するなんて死んでも願い下げだ！」

そうして、いよいよハラワタ煮えくり返って店から出ようとしたらだ…

「ハッハッハッハ！
こんなバカ野郎にマトモな剣の価値なんざ分かりゃしねえぜ。
兄チャンさえ良けりゃ、ちっと話しでもしようや。」

「デルフ、この野郎め！」

「あ～～ん？」

姿は見えないが…何処からか、酷いだみ声がオレを呼び止めた。

「何だよジジイ。店の奥にまだ誰か居るんじゃねえか。」

「違うよ。ここさ、兄チャンのすぐ近くさ。
武器樽にほったらかしにされてんだ。」

おっほ！喋る剣か。
あちらサンが呼び止めたんだ。無視して通り過ぎんのも失礼だわな。
どれどれ、どいつが当たりなのかなっと。

「お、今握ってくれた剣がオレ様だ。」

「……」

一応覚悟はしていたが、他に刺さってる商品と比べても、こりゃまた一段と……放置されてきた年季を感じさせる剣。
つーか、赤錆だらけでゴミ同然の品物じゃねえか。

「なぁなぁ～こんな居心地が悪ィ場所とはオレ様もオサラバしたいんだ。
ついでに拾ってっちゃくれないか？」

「うーん・・・・」

正直、このインテリジェンス・ソードは気になる。だが、ジジイから買い取るってのが気に食わん。

なにより、足下見られてぼったくられた末に魔法が掛かってる部分が刀身だったらなぁ。
固定化はまず最低限だとしてだ。
コイツの固有能力は何だ??
打ち直しても、その魔法が有効なのか…それが問題だ。

「よォ若僧。そのボロ屑が気になるのか?
ソイツはデルフってんだが、どうしようもねえ疫病神さ。ソイツが来てからウチはみるみるうちにこのザマだ。欲しいならくれてやるぜ。
ただし、さっきの剣と同じ１００エキューでだ。」

背後に目が無いから分からんが、声の調子からジジイがほくそ笑んでるのが分かる。
ていうか…ジジイの言うことが本当なら、魔法っつーか呪いの剣じゃないか!それも、笑い話じゃ済まないレベルの!

「なぁ～頼むよ。これ以上こんな墓場に放置されたくないんだ。
ここは１つオレ様…いや、オレっちを助けると思って・・な?」

それにしても、このデルフって剣・・ボロ屑の癖して、えらく図々しい奴だな。

（おいデルフ。テメェは柄に魔法が掛かってんのか？）

（あ～～、オレっち随分長生きだからなぁ。
そこら辺はサッパリなんだわなぁ。）

（バッカヤロウ！こりゃお前を買うか買わないかの判断に繋がんだぞ！）

（うーん…うーん・・・駄目だ、思い出せねえや。）

「お～い、何ヒソヒソ話してんだぁ？
買うか買わないのか！サッサと決めれよ。」

ああ、そういえば古代中国には死んだ名馬の骨を大金で買った逸話も在ったな・・・仕方無い。このデルフは、魔法武具の打ち直しの練習台だと思えば安いもんか。
未来の商売への自己投資だ！

「ジジイ・このデルフ買わせて貰うぜ。」

「お、お、ヨッシャー！」

「へえ。あんまりデルフが鬱陶しいと思ったなら、その鞘に納めちまいな
（まぁ、ただ納めるだけじゃ勝手に出て来るんだがな。）」

「確かに戴いた。それじゃ、コレで本当にオサラバだ。」

駄目なら駄目で、失敗作として飾るなり、話し相手にでもしてやらぁな。

■

「お～い、帰ったぞー」

我が家は良い。

何が良いって商売の時みたく人の顔色を伺わなくて良いし、周りには小さい頃から付き合って来て人情に溢れる人間ばかりだから良い。
やはり、トリスタニアなんて都会は人を荒ませちまうんだ。

それに我が住処が存在する村…その大元である領主サンは、余所の貴族よりも寛大なのか年貢や税率が甘い。
ビバ・ヴァリエール！！

「さてと、帳簿も書いたし……戸締まりも完璧だ。」

帰路に着く前に、色々と商品を売りさばいて来たが…ギリギリ赤字だった。
まぁ、必要だからって魔法武具関連の本を買い漁ったオレが悪い。

「兄チャン、兄チャン！
オレっちを打ち直してくれんじゃ無かったのか？」

何かボロ屑がケンケン喚いてるな。

「よし、疲れたから今日はもう寝る！！」

「そんなぁ〜〜」

「オレ達生物は、無機物のお前と違って腹も減るし眠くもなる。
あと、うるさいと山に捨てに行くぞ。」

「……」

ふぅ、最初からこれぐらい空気を読んでりゃいいんだ。
さて、明日：明日から魔法武具の本を読む。
それから適材を見繕うかな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3979ba/

行商にトラブルは要らない！！

2012年1月10日22時50分発行